

うま獣医のよもやま話 ⑪ 池田寛樹 獣医師

ロドコッカス感染症について



静内診療所 池田 寛樹
新ひだか町静内出身
平成22年3月 酪農学園大学卒業
平成22年4月 日高軽種馬農業協同組合入社
静内診療所勤務 現在に至る

6月に入って出産も落ち着き、皆様も安心して眠れる日々が増えてきた頃でしょうか。そんな中そろそろ子馬の病気も増え始める頃だと思いますので、今回はロドコッカス感染症についてお話をさせていただきたいと思います。すでに知っている方が多いかもしれませんが、どうぞ少しでもお付き合いください。

【どのように感染するのか】

生後1～3週間までに子馬が飼育環境の土壤中に存在する菌を吸い込むことで感染し、2週間ほどの潜伏期間を経て発症します。感染した子馬が気管の分泌液とともに排出された菌を自ら飲み込むことで、菌が消化管を通じて糞便中に排泄され土壤を汚染します。また、感染しても発症しない成馬が糞便中に菌を排泄することでも土壤が汚染されます。土壤が菌で汚染されることで他の子馬にも感染が拡大してしまいます。土壤中の菌は消毒剤に対して抵抗力を持つため一度土壤が汚染されると清浄化するのが難しくなります。また感染した馬はパドック放牧などによる隔離が行われると思いますが、パドック内から汚染源となる糞を除去することや、できるだけ健康馬とのパドックの共用を避けることが土壤の汚染や感染の拡大を阻止する上で重要となります。

【子馬の免疫状態】

加齢とともに感染の抵抗性が備わってくることから、子馬の免疫状態が感染・発症に関連しています。ロドコッカスに対する免疫防御は初乳による移行抗体だけでは不十分なので、たとえ十分な初乳を摂取していたとしても、子馬自身の免疫能力が発達してくる3ヶ月齢位までは全ての子馬に感染・発症する可能性があるということになります。

【どのような症状がみられるのか】

多くの場合で38.5～40.0℃の発熱、膿性の鼻水や咳、速くて浅い呼吸などの呼吸器症状が認められます。症状の進行とともに、呼吸困難の状態（鼻孔の拡張や

腹式呼吸）となり、ぐったりして運動を嫌い、横になる時間が増えます。また呼吸器症状以外にも腸炎による下痢などの消化器症状や、関節炎・骨髄炎による跛行、眼のブドウ膜炎などが認められることもあります。ただ発熱以外の症状を見せないまま病態が進行していく場合もあるので、見た目は元気でも発熱が続くような場合は注意が必要です。さらに、母馬の乳房をチェックすることで子馬が乳を飲んでいるかどうかを確認するなどちょっとした子馬の様子の変化を見落とさないようにすることが重要です。



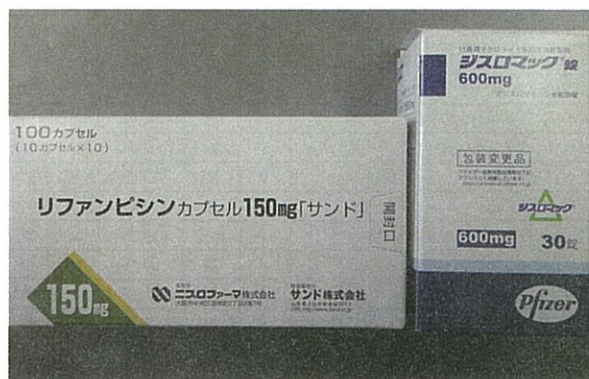
関節炎による関節の腫脹



ブドウ膜炎による緑色の眼

【最後に】

ロドコッカス感染症は、菌が土壤中に存在しているため予防するのがなかなか難しい病気です。そのため早期に発見するには毎日の検温や注意深く様子を観察することがとても大切になります。ロドコッカス感染症に対して効果の高い抗生物質があり最近では死亡率が減ってきていますが、治療期間は長くなることが多く治療費も高額になってしまいます。しかし、早期に発見することができればそれだけ治療期間を短くすることができますので少しでも子馬に異常を感じれば、獣医師に相談することをお勧めします。過去にロドコッカス感染症が出たことのある牧場は土壤中に菌が存在する可能性が高いため特に注意が必要です。



ロドコッカス感染症に効果の高い抗生物質

以上になります。最後まで読んでいただき有り難うございました。